

る所の佛教の本質は、法界觀、人身觀、佛陀觀、教法觀、行法觀、此の五點が眼目であつて、而して之を貫ける思想は、開顯主義、中心主義、統一主義といふものに外ならぬと思ふ。是れに導かれて、日蓮上人は其の開顯主義を世間のことに應用して、『天晴れぬれば、地明に、法華を知るものは世法を得べきか』と説かれた。佛教は世法を順應せしめて進まなければならぬといふことを達觀したので、つまり佛教は超世間的のものではないといふことは、前にも述べた通り世法開顯を理想として居る爲である。又中心主義を明にしては、『我れ日本の柱とならむ。我れ日本の眼目とならむ。我れ日本の大船とならん』と誓はれたのである。多くの宗教は、博愛の理想、平等の理想があるから、往々國家を中心とする主旨を忘れて一足飛びに世界的の理想のみを達せんとする虞がある。法華經は普遍的の大宗教であるけれども、前にも云つたやうに中心主義が其特色の一つであるから、我が日本國に於て現れて、日蓮上人が、之を開顯し發揮し來つて、日本の柱となり日本の眼目となつて、日本よりして廣く世界に其の教を及ぼさうと言はれたのである。日は東よりして西を照らして居る。丁度日本の佛教も、此の日本から光明を放つて十方世界を照らすものであるといはれて居るが、其處に中心思想が強く現れて居ると思ふ。唯々國家あるを知つて世界あるを知らず、個人あるを知つて人道あるを知らぬと

いふことは、勿論非難すべきことではあるが、又唯々漠然たる博愛を主張して君を知らず父を知らずといふことも、昔から孔孟の學によつて種々非難されたことであつて、忠孝といふことは、是れは動かすべからざる東洋の倫理である。されば單に狹隘なる國家中心の理想を以て、世界とか人道とかを無視するといふことでは、將來日本の文明を完成することは到底出来なと思ふ。處が法華經には其處にチヤンと博愛の理想と中心主義とが餘程良く調節されて居る。十方に互つて一切衆生を濟度する教であるけれども、一面には中心主義を眼目として適當に其の間の調節を遂げて居る。此の精神が日蓮上人の信仰に移つて、『我れ日本の柱とならん。日本の眼目とならん』と言はれたので、其處に法華經の中心主義が現れて居るのであると思ふ。又統一主義の元氣が發しては、一天四海皆歸妙法の宣言ともなつて居る。又人身觀の信仰は、『日蓮が身は魚鳥を混丸して成せる身なれども、心に法華經を信じ参らしぬれば、梵天帝釋も恐れとせず』との告白となつて居る。又實在の信仰は斯ういふ愉快な教訓を生んで居る。それは『遷滅無常は昨日の夢、菩提の覺悟は今日の現なるべし』といふので、此聖語を玩味して見ると、幻の如き小我の我れは昨日の夢と消え去り、絶對不滅の我れは現在の我れなりとの自覺を以て生活を續けるのであつて、即ち精神生活の要諦に這入つて居るものと思ふ。又理想と共に

現實を尊ぶの趣味であるから、『極樂百年の修業は穢土一日の功に及ばず』といふ聖語となつて居る。繁累もなく迫害もなき極樂に百年の修業を積まんよりも、この繁累もあり罪惡の多き現實の世に於て奮闘しつゝ向上する一日の功德が勝ると云ふ信念に立つのである。又生活の事實の上に應用しては、『宮仕へを法華經と思召せ』、『五節句の時も唯々南無妙法蓮華經を唱へさせ給へ』、『女房と酒打飲んで南無妙法蓮華經と唱ふる所、衆生處遊樂なり』との聖語となつて、娛樂の場合になつても信仰と一致を教へてある。又家庭團樂の場合にあつても信仰を失はないやうに説かれて居る。更に困苦缺乏に打勝つ力としては、あの北海風寒き佐渡ヶ島に流された時に、『世の初めより流されしものは多からんも、日蓮の如く喜び身に餘るものはよもあらじ』と云つて少しもそれを苦痛とされなかつたのである。又身延山にあの寂寞たる生活をして居つても、身延の山は即ち淨土であり、樂土であるといつて、『誠に身延山の栖家は、千早振る神も恵を垂れ、天降りますらむ峰の紅葉いつしか色深うして、たえだえに傳ふ覺の水に影をうつせば、龍田の川の水上も斯くやと疑はる』と書かれて居る。日蓮が此處に居れば神も降つて來るといふやうなことを云つて、法悅的生活を樂んで居らるゝ。又菩薩行の自覺としては『佛弟子たらんものは、必ず四恩を知つて之を報すべし』と云つて、國王の恩、國家の恩と

いふことに非常に力を注がれて居る。『國亡び家滅びなば、佛をば誰か崇むべき。法をば誰か信すべき。先づ國家を禱つて須らく佛法を立つべし』と宣言し、國の亡びるのは第一の大事である。何が大事と云つても國家の亡びる程大事なことはないと云うて、儼乎として國家中心の思想を教へて居るのである。又『弟子一佛の子として、諸經の王に仕ふ。何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや』と云つて、佛教の衰頹を見ては放擲することは出來ない。一身に責任を帯びて佛教の振興を圖らなければならぬと誓つた。又『鳥と蟲とは鳴けども涙落ちず。日蓮は泣かねども涙ひまもなし』と云つて、博愛の精神に生きて、一切衆生のことを考へれば、聲を揚げて泣かないけれども、日蓮が慈悲の涙は乾く暇もないと云ふことを言つてをる。更に『飛ぶ鳥の子を養ひ、地を走る獸の子に責めらるゝを見れば、魂も消ゆるばかり』と云つて、鳥獸でも、親は子を可愛がるものだ。人間として親の恩を思へば、魂も消ゆる思ひありと云ふことを教へて居る。博愛の道は一切衆生に對して慈悲の涙を灑ぐと同時に、父母に對しては又孝養の精神を盡さねばならぬとを教へて居る。是れ皆菩薩行の自覺より生みたる信仰の發動に外ならぬと思ふ。

此の如く見來れば、宋儒以來今日に至るまで繰返されつゝある佛教に對する非難、即ち佛教は厭世

主義、獨善主義、惡平等主義、或は消極主義、非國家主義であると云ふやうな非難は盛んに繰返されて居るものであるが、佛教の他の方面に於ては、これ等の缺點があるやうであるけれども、それは佛教の統一觀を逸した所に起る弊害であるが、之を法華經の上より見れば、佛教は決して厭世的、獨善的、惡平等的、消極的、非國家的のものでないと云ふは、其の開顯主義、統一主義、中心主義によつて、明白に理解されることと信するのである。併しながら、佛教は經典が非常に多いからして、其の分裂した一部一部に就いて見れば、人類の向上を阻礙するもので、價値の無いものであると云ふやうな汚名を受けなければならぬ點が絶無とは云へぬが、是れ日蓮上人が大聲疾呼して、さう云ふ佛教家に大反省を警告した所以である。以上述ぶる所は極めて概要に過ぎないのであるが、併し法華經の趣意によつて佛教を解釋することの大體は云ひ盡した積りである。

人と教終

不許複製

大正六年十二月十八日印刷
大正六年十二月二十二日發行

著者 本多日生

發行者

增田義一
東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六番地

發行所

東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
電話京橋 八七四、八七五、八七六、九八九
振替口座 東京 三二六番

株式會社 秀英會印行

人と教

— 定價一圓廿錢 —

2-317

□ 鍊

膽

術

第九版

永平寺管長
日置默仙禪師述

定價五十五錢
稅四錢
三六判總布

□ 活

才

術

再版

南天棒
中原鄧州老師述

定價六十五錢
稅四錢
三六判總布

□ 禪

と

健

康

三版

陸軍中將
堀内文次郎閣下著

定價六十錢
稅六錢
三六判總布

□ 一

棒

一

喝

五版

禪畫洞
池上文僊先生著

定價六十五錢
稅六錢
三六判總布

□ 人

と

教

新刊

大僧正
本多日生師著

定價一圓廿錢
稅八錢
四六判總布

□ 信仰に至るの道

近刊

大僧正
權田雷斧老師著

定價未定
稅未定
四六判總布

□ 力の生活

四版

文學博士
前田慧雲先生著

定價八十五錢
稅八錢
四六判總布

□ 徹底論

七版

三生坊道人著

定價一圓二十錢
稅八錢
三六判總布

終